

社内の環境意識が高まったのは

トンボのおかげです！

〜マツダ（株） マツダR&Dセンター横浜〜

学生部会
突撃
インタビュ

毎年、トンボの本調査でお世話になっているマツダ株式会社の「マツダR&Dセンター横浜」は神奈川県守屋町にあります。2016年からは、学生部会で仮設ビオトープを置かせていただいております。学生たちが何回回数も多くなりました。調査中には社員の方とすれ違ふこともあります。

「そっだ、社員のみなさんはトンボのことどう思っているんだろう？」そこで学生部会でマツダのみなさんに突撃インタビューしてみました！

ご協力・マツダ（株）

マツダR&Dセンター横浜 統括

大川 洋己さん

R&D技術管理本部開発管理部

R&D横浜業務グループ マネー

ジャー 藤田 健二さん

R&D技術管理本部開発管理部

R&D横浜業務グループ 岡康治

さん

学生部会 高見奈桜、澁谷佑一郎、

横川雄樹

学生 いつもありがとうございます。

す。今日はよろしくお願いします。

今までお聞きする機会がなかった

ことをお聞かせください。まずは

会社全体のお話から。

マツダという会社にとって、トンボ調査はどんな存在ですか？

大川 ご存じのように自動車はCO₂を排出せざるを得ないものです。しかしだからこそ、環境へ配慮し、持続可能な社会を作るために貢献しなければと思っています。

す。今、社をあげて「サステイナブルZoom Zoom宣言」として、CO₂の排出を可能な限りゼロにできないかと考え、環境にプラスになることに積極的に貢献していこうとしています。調査に参加しているのもそのためです。

藤田 この工場でいえば木々もブナとかドングリがなる木を多くしていて、そうすると鳥が来るようになります。木の種類にも配慮しながら緑を増やそうとしているんです。

大川 もともとこの敷地は1925年に日本フォードが作った製造工場でした。1987年にマツダの研究施設となってからも、それ以前にあった地域住民とのつながりも継承したくて、そういう意味でトンボの調査に参加しているということもありますね。

社内からトンボ調査やビオトープ設置について反応がありますか？

岡 私は調査に立ち会って、田口（正男）先生ともお話しすることがありますが、中庭の水場が「ビオトープにするには最適な条件」とお褒めいただいていた。生物の多様性が保たれるように、フォアラムのみなさんのご協力もいただいて、昆虫や水生生物が暮らせる水場に整えています。昨年の調査ではこの池に15種類もの水中生物がいることが分かって、社内でも話題になったんです。

藤田 マツダR&Dセンター横浜はごらんのように、現代的なコンセプトをもつデザインの建物です。以前はここで新車のCMや広告を撮影したりしていたので、そういうモダンな感じになっているんです。そのため、以前は、水草など植物があるのを不思議に思っていた社員もいて「もっと手入れをし

た方が良いのでは」「水を交換した方がい」という意見も来たりしましたね。

岡 もともとは何も植物がなく、満たされた水の表面に広がる波紋を見るような、デザイン的な池でしたからね。そこで、なぜいまのように自然の状態にしているのか、それが生物多様性をどう作っているのかを知ってもらうために、トンボ調査のことを社員に認知してもらおう働きかけをしてきました。

私はいつも調査に立ち会っているの、調査を見た社員から「あれは何をしているの？」などという聞かれることも多く、その都度説明をしていたら、今度は「岡さん、今日はアカトンボ（アカネ属のトンボの総称）がすごく多かったですね」「電信

柱にトンボがいっぱいましたよ」など、声を掛けられることが多くなりました。みんながトンボを気にするようになったんです。すると、自然になぜビオトープがあの状態なのかも理解されていくようになったんです。

